

● 朝のこない夜はない ●



「プラス思考^{しこう}」で

すべてに感謝^{かんしゃ}して

ゆきましよう

山首 鈴木正修

プラス思考しこう

「プラス思考しこう」「マイナス思考しこう」ということがよく言いわれますが、世よの中には同おなじ物事ものごとを見ても楽観らっかん的に見る人ひともあれば、悲観ひかん的に見る人ひともいます。先代せんだいの日達上にったつしょう人は、常つねに楽観らっかん的に物事ものごとを見、判断はんだんされる方かたでした。

日達上にったつしょう人ひとのように、楽観らっかん的に物事ものごとを見られる人ひとは得とくだと思おもいます。病氣びょうきにもなりにくく、人間にんげん関係かんけいも上手うまくゆくに違ちがいありません。他方たほう、悲観ひかん的に物事ものごとを見て

しまう人ひとは病氣びょうきにもなりやすく、人間にんげん関係かんけいも上手うまくゆきにくいものです。かと言いって、そういう人ひとにいくら「楽観らっかん的に」
と言いっても、そう簡単かんたんに変かえられるものでは
ありません。しかし、究極きうごくのプラス思し
考こうはどんな人ひとにでもできます。それは感かん
謝しゃすることです。

心こころの力ちから

感謝かんしゃの心こころで末期ガンまつきを完治かんちさせた方かたを

ご紹介します。

『遺伝子スイッチ・オンの奇跡』「ありがとう」を十万回唱えたらガンが消えました！』という本を出版された工藤房美さんです。

工藤さんは四十八歳の時にガンが見つかりました。旦那さんはそれ以前からうつ病で、仕事もできず、家を飛び出すこともあったそうです。そこで家族を支えるため、工藤さんが働き、心身ともにストレスを抱えていました。

ある日、職場で鼻血が出て止まらなくなりしました。周りの人が心配して救急車

を呼び、大きな病院で精密検査をしてみると子宮ガンだとわかったのです。その時、医師に「なんでこんなになるまでほつといたんだ」と怒鳴られたそうです。

すぐに手術をすることになりましたが、もしかしたら死ぬかもしれないと思い、三人の息子さんに遺言を残しました。長男には「あなたを誇りに思う。これからも堂々と自分の好きなことをやりなさい。病気になってごめんね。大好きだよ」と書き、次男には「楽しいことを見つけたことが得意だから、好きなことを見つけたい。楽しんで生きて下さい」、小学生の三

男には「大変な時は我慢しないで周りの
おとなに助けてもらいなさい。お兄ちゃん
達と三人で協力したら何でもできるよ」
そして最後に「愛してる。あなた達の母
親になれてよかった。あなた達をいつま
でも愛してる」と書き残し、手術の前に
息子さん達に渡しました。いよいよ手術
の日が来ましたが、その直前に主治医が
やってきて「残念です。私の腕がふるえ
なくて残念です。あなたのガンは広がり
すぎていて、取り除こうとしても他の臓
器を傷つけてしまう可能性が高いので手
術はできません」と断られてしまいまし

た。しかし、出血を止めるために普通の
放射線治療を三十回程行ないました。そ
の上で、「ラルス」という治療法を試み
ました。それはものすごく過酷な治療法
です。

一回目の治療の時、看護師さんが「タ
オルを持っていてくださいね」と言った
そうです。口に咥えて痛みに耐えるため
です。そして「これから痛くて苦しい治
療をします。痛み止めなどは一切使いま
せん。なぜなら、痛み止めや麻酔を使う
と、先生がずっとあなたのそばについて
いなければならないからです。先生はあ

あなたのそばについてあげられません。
ですから、あなたの口にタオルを入れます。耐えてもらうしかありません。この台の上であなたは一ミリも動くことができません。ですから、あなたの体をこの台に固定します。その器具をつける作業に一時間かかります。その後、治療に一時間。器具を外すのにまた一時間かかります」と言われ、体をグルグル巻きに固定され、口にタオルを押し込まれた時には、逃げだしたいと心底思ったそうです。しかし、されるがまま、子宮に直接の放射線治療が始まりました。

工藤さんの言葉です。

「もう痛いなんてもんじゃない。苦しいなんてもんじゃない。始まると同時に悲鳴を上げたが、タオルのせいで声にならない。誰に届くこともない悲鳴を上げ続け、あふれる涙を拭うこともできなかつた。これは治療ではなく拷問だ」
そんな想像を絶するような治療を、合計三回行なわなければなりません。
二回目の治療の前日に三男の小学校の先生から『生命の暗号』という本が届きました。筑波大学の村上和雄先生が書かれた本です。村上先生は遺伝子研究をさ

れている日本の第一人者です。

その本には「人間の細胞は、体重が六十キロあれば六十兆個ある。その一つひとつに遺伝子がある。遺伝子の働きによって人間の能力や、病気になるかならないかも決まっている。ただ、遺伝子の九十五パーセントはスイッチがオフになっている活動していない。活動しているのはたったの五パーセント。ガンという病気にも、人間をガンにする遺伝子とガンを抑制する遺伝子がある。抑制する遺伝子が働いているとガンにはならない。そのバランスは心によって決まる。プラス

思考の人は抑制遺伝子がよく働いてガンになりにくい。マイナス思考の人は働きが逆になる。究極のプラス思考は前向きな心で感謝すること。また、ノーベル賞クラスの学者が束になってかかっても大腸菌一つ作れない。命を作り出すことは到底できない。さらに最初の生命が誕生する確率は一億円の宝くじが百万回連続で当たる確率とほぼ同じ」と書かれました。

工藤さんはそれを読み、＼とんでもなく貴重な命を頂いているんだ＼と知り、＼ありがたくてしかたがない＼と思えて

きました。そして、活動かつどうしていない九十
五パーセントの良よい遺伝いでん子しを目覚めめざさせ
ようと決心けっしんすると、それからガンになっ
ていない目・耳・手・足などあらゆる場ば
所しよに「ありがとう」と言い続けました。
そして「ガンになった細胞さいぼうだってこれま
で私を支えてくれていたのは同じことだ。
ガンなんかになりたくはなかっただろう。
ガン細胞さいぼうになってまで私になにかを気づ
かせようとしてくれた、その細胞さいぼうにも、
健気けなげさに心から『愛いとおしい』と思おもい、本
当とうにごめんなさい。ありがとう」と、一
晩中休ばんじゅうやすむことなく「ありがとう」を言いい

続つづけた後あと、二回目かいめの過酷かこくなラルスの治療ちりよう
を受けうけました。すると、痛みいたも苦しみくるも
まったくなかったのです。三回目かいめも、痛
みも苦しみも感じませんでした。その後、
検査けんさを受けて結果けつを待まっていると主治医
から「工藤さん、ガンが消きえているよ」
と報告ほうこくがありました。しかし他ほかの部分ぶぶんを
調しらべてみると、肺はいと肝臓かんぞうに転移てんいしていま
した。肺ガンは肺全体はいぜんたいにあり、肝臓ガン
は拳こぶしほどの大きさおおさのものがありました。
生いきているのが不思議ふしぎなくらいで、この
ままだと余命よめい一か月げつという状態じょうたいでした。
治なおる確率かくりつは一パーセントしかないと言つげ

られましたが、そんな時でも入院すると
工藤さんは、得意な裁縫でかわいらしい
帽子を作って、抗ガン剤で髪の毛の抜
けた人達に配りました。

抗ガン剤の影響で工藤さん自身も髪の毛が
たくさん抜けましたが、その毛を集めて一本一本に
「ありがとう」と言い続けた。 「ありがとう」と
言い続けていくと、ありがたさが体の中に充満して
くるのがわかり、涙が止まらなかつたそうです。
今生かされていることが、とにかく
ありがたい。 と思えたのです。

「ありがとう」の生活を続けた数か月後、

検査をするとガンがすべて消えていま
した。主治医は「こんなことはありません。
こんな症例は見たことがない」と驚いて
言ったそうです。

その後、工藤さんはカレー屋さんを
始めましたが、工藤さんの話を聞きたいと
大勢のガン患者さんが訪れるそうです。
そして、話を聞いて実践した多くの人が、
工藤さんのようにガンが消えたそうです。
良くならなかつた人もあつたようです
が、工藤さんの話を聞いて良くなる人と
良くならない人、それぞれに特徴があり
ました。良くなった人はみんな素直な人

でした。＼ありがとうと言いましよう＼

という話を聞いて「はい、わかりました。

ありがとうと言います」と言って実践し

たのです。反対に「もう十分感謝なんか

しているから、これ以上ありがとうを言

う必要はない」「感謝は十分してるけど、

どうしても許せない人がいる」「感謝な

んととてもできない。どうして私だけが

こんな病気になるんだ」という人は良く

ならないそうです。

本の最後に「プラス思考で病気に打ち

勝ち、幸せに暮らす秘訣が七つある」と

工藤さんは記されています。

一、感謝をする。

二、どんな時も明るく前向きに考える。

三、思い切って今の環境を変えてみる。

四、人との出会いを大切にする。

五、感動する。

六、世のため、人のためになることを

考えて生きる。

七、先のことを心配せず、今与えられ

た仕事に一生懸命になる。

感謝の心は間違はなく運命を変えます。